Osaka University Knowledge Archive

Title	北米における金時鐘
Author(s)	Ryu, Catherine
Citation	越境文化研究イニシアティヴ論集. 2020, 3, p. 33-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75558
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

北米における金時鐘

CATHERINE RYU

ただいまご紹介にあずかりました Catherine Ryu と申します。

本日は，金時鐘さんの生誕 90 年をお祝いするこのような場にお招きくださり，ほんとうにありがとうございます。私のような，これまで金時鐘さんとお会いしたこともなく，金時鐘さんの膨大なお仕事を十分に理解しているわけでもない者に，このような画期的シンポジウムで発言する機会を与えてくださいましたことに，まずは心からお礼申し上げます。

宇野田さんがご紹介くださいましたように，私は，アメリカのミシガン州立大学で，日本文学を教えています。これまでのところ，在日文学は，私の研究・教育のなかでは，二次的なテーマにとどまっています。しかしながら，私は，長年にわたって，ある作品をとても大切にしてきました。その作品というのは，猪飼野に生きる女性たちの苦難に満ちた人生を描いた素晴らしい小説，金蒼生の『赤い実』です。『赤い実』を英訳し，さまざまな観点から分析するなかで，私は，在日女性作家により生きられ描かれた猪飼野の世界を垣間見る経験をしてきました。

私の猪飼野文学についての狭い理解は，2017 年にはじめて宇野田さんと会ったことで，変わり始めました。2017 年にアメリカのリーハイ大学で開催された最初の在日文学ワークショップで，私は金蒼生がりんごのモチーフを『赤い実』においてどのように用いているかについて発表したのですが，そのあとで，宇野田さんが，同じくりんごをモチーフにした，宗秋月の詩「にんご」を紹介してくれました。「にんご」は，私のような読者にはなかなか理解しにくい作品でしたが，情動を揺さぶる，とても深遠な，抗いがたい磁気を帯びた作品でしたから，序文を付して英訳することにいたしました。さいわいなことに，ハワイ大学出版会から発行されている *AZALEA: Journal of Korean Literature & Culture* という学術雑誌の，在日文学を一緒に研究している仲間である Christina Yi と Jonathan Glade が編集し 2019 年 5 月に発行されたばかりの在日文学特集号（第 12 号，Zainichi Literature and Film という特集を掲載）に，私の「にんご」の英訳と序文も収録されています。

AZALEA のための原稿を準備している過程で，私は，清水澄子さんと電子メールで連絡をとるようになりました。清水さんは，1986 年の『猪飼野タリョン』（思想の科学社）や 2016 年の『宗秋月全集』（土曜日術社出版）を含め，宗秋月の書いたものの編集を長く担ってこられた方です。電子メールのやりとりを通じて，私は，彼女の宗秋月とその作品に対する情

熱に驚きまた感動し，私自身の日本文学研究者としての人生を変えるような決断をするに至りました。私もまたこの詩人とその作品の意義を世の中に伝える者になろう，たとえ私の能力はその役割には不十分であるとしても，と決めたのです。そして，宗秋月の詩人としての歩みを勉強しはじめたとき，いかに金時鐘が彼女を大阪文学学校に導くうえで重要な役割を果たしたかに気づいたのですが，ちょうどその頃，宇野田さんからこのシンポジウムの計画をうかがいました。そんなこんなで無謀にも今日ここでお話しさせていただいているわけですが，金時鐘さんを前にして北米における金時鐘受容について語るというこの状況が，いまだに自分でも信じられません。

まずは，北米における在日文学研究の現状について簡単にご紹介いたしますと，たぶんみなさんもご存知のように，在日文学研究は，まだ取り組まれるようになったばかりの研究領域です。今日でも，標準的な大学生は「在日」という言葉を聞いたことがないだろうと思います。実際，この前の学期に，「日本の文化と文学」というコースで在日文学について教えた際には，受講者はみな日本語を専攻もしくは副専攻としている学生たちでしたが，在日コリアンについては何も知りませんでした。日本への短期留学を終えた学生たちでさえ，在日社会の存在に気づいてはいませんでした。このことは，日本の外にいる人々にとって在日社会はいかに見えにくいかということとともに，米国におけるアジアに関する教育のカリキュラムに在日研究を組み込んでいく必要性がいかに高いかということをも示しています。

このことと関連しては，今までのところ英語で出版された在日文学のアンソロジーはわずか 2 冊にすぎないということを指摘しておきたいと思います。1 冊目は，Melissa Wender 編，2010 年刊の *Into the Light: An Anthology of Literature by Koreans in Japan*（『光の中に：在日コリアン文学アンソロジー』），2 冊目は，約 10 年後の 2019 年に刊行された，John Lie 編 *Zainichi Literature: Japanese Writings by Ethnic Koreans*（『在日文学：エスニック・コリアンによる日本語作品』）です。この 2 冊が収録しているのは，わずか 7，8 人の著者の作品のサンプルで，しかも金史良・金達寿・柳美里の作品は両方に収録されています。つまり，英語の読者は，一握りの在日作家・在日作品にしかアクセスできないのです。また，散文作品のほうが詩作品よりも好まれる傾向にあります。詩作品は，1 冊目が収めているのは宗秋月の作品だけ，2 冊目が収めているのは李正子と岡真史の作品だけです。さらに，在日小説の英訳やそれについての英語での研究は，著名な作家，多くの場合は李良枝や柳美里のような芥川賞作家に偏っています。

在日文学の英訳が少ない背景には，在日文学を英訳しようとすると，日本語と朝鮮語，そして両者の標準語と非標準語をカバーする多元的で異種混交的な言語の世界を読み解ける能力が必要になるという，翻訳者にとっての大きな壁もあります。私が金時鐘の詩作品の英語圏の読者における現在および未来の受容について考えてみたいのは，この文脈においてです。

私の知るかぎり，英語で読める金時鐘の詩作品の数はごく限られています。金時鐘の詩作品は，まさにその伝説的な難しさと奥深さによって知られています。彼の詩的言語のユニークさは，彼自身の言葉で言うなら，植民地支配者の言語としての日本語への報復の「武器」，ということになりますが，このユニークさは，彼が，標準的な日本語を意図的に変形して，在日コリアンの言語，すなわち，《日本文学》に対置されるものとしての《日本語文学》を生み出すべき言語を構築した，という事実にあります。このことが，彼の詩的言語を不透明で多層的なものとすると同時に，おそらくは意図されているわけではないある側面，すなわち，「翻訳不可能性」という側面を加えています。しかしながら，漢字・カタカナ・ひらがな･ハングルを併用しながら，日本語（東京語，大阪弁，猪飼野語などを含む）と朝鮮語を並置したり混用したりする，という表現方法は，かならずしも金時鐘の詩だけに固有のものではありません。そのような言語戦略は，程度の差はあれ，ほかの在日作家の創作においても共通して見られるものです。

私の見るところ，金時鐘の詩を特徴づけているのは，いま述べたような言語的な試みよりもむしろ，本質的に概念的な彼の詩的想像力の，並外れた創造性です。金時鐘の作品においては，詩人は，空間的・文化的・歴史的・言語的な境界や論理を軽々と越え，そうすることでまったく新しい彼自身の世界を創り出すとともに，読者を自分の世界理解・自己理解の限界に直面させることにより困惑させます。『猪飼野詩集』の「へだてる風景」と「イカイノ　トケビ」という二作品を読むという経験は，私にとって，ほんとうに，もどかしくありつつも心を解き放たれる経験でした。何度も読みましたが，私はいまだにこれらの作品を明瞭に理解するには至っていません。しかし，在日の人々が遺した痕跡を空間的にも歴史的にもたどり圧縮することで，猪飼野の風景として描き出されることになる，詩的想像力上の川や海や集落や街。これを描き出す金時鐘の表現の仕方は，あまりに魅力的で，私はこの詩人の人生経験と世界観についてもっと学びたいと思わずにはいられません。金時鐘の詩作品においては，私は，ぼんやりとではありますが，宗秋月や金蒼生といった二世の女性の書き手にも一貫して流れているように思われる在日性の底流を感じ取ることができます。

最後に，北米における金時鐘受容の新しい動向についてよりオプティミスティックな展望を示して，私の報告をしめくくることにしようと思います。在日研究の最も新しい出版物の一つとして挙げることのできるものとして，現在立命館大学で教えているアジア系アメリカ人の学者 Jackie J. Kim-Wachutka の *Zainichi Korean Women in Japan: Voices*（『在日コリアンの女性たち』）があります。英語で書かれたこの 2018 年の書物において，著者は，朴和美が金時鐘を彼が「標準的な話し言葉」の正体を暴露する方法と関わって参照している箇所を引用しています。朴和美自身が在日の書き手であり，2006 年から 2012 年にかけて在日女性の書き手により刊行された『地に舟をこげ』の編集委員の一人でもありますから，Kim-Wachutka の議論は，在日の書き手の間での相互参照の問題であるといえます。しかし

ながら，この本は，Routledge という欧米の主要な学術出版社の 1 つから刊行されている Contemporary Japan Series の 1 冊ですから，詩人金時鐘の作品はいまやグローバルな知の一部となり日本の在日コミュニティをはるかに超えて流通しているともいえます。

ここで，私は，「日本の在日コミュニティを超えて」というフレーズの重要性を強調しておきたく思います。なぜなら，金時鐘の文学的達成が 21 世紀に紹介されるべきなのは，まさにそのような場所に向けてだからです。この点に関わる事例としては，2018 年にジョージア大学で Changhwan Kim が完成させた博士論文（*Transpacific Poetics in the Works of Sijong Kim, Inhwan Pak, and Theresa Hak Kyung Cha*）を挙げることができます。著者は，彼が「トランスパシフィックな詩人たち」とよぶ，博士論文のタイトルに示されているような詩人たちとの関係において，金時鐘を位置づけています。この博士論文は新しすぎてまだ公開されていませんが，私はこの著者がどのように金時鐘を論じているのか読むのを楽しみにしています。博士論文の要旨によると，この著者は，金時鐘の詩作品を「マイナー・ライティング」の例として論じており，その「マイナー・ライティング」については，「主要な諸言語の脱領土化，多言語使用，伝統的なジャンルの否定，母語の否定，多様なイメージやテクストや引用符無しの引用による文学的モンタージュの構成」などを含む書き物のことであると説明しています。

この文脈で重要なもう一つのポイントは，在日のテクストは，「trans-」をコア・コンセプトとする新たな研究のうちに位置づけられつつある，ということです。実のところ，さきほど紹介した 2 冊目の在日文学のアンソロジーは，カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所の Transnational Korea Series（国境を越えるコリアシリーズ）の 1 冊として出版されています。私自身，今年から始まった宇野田さんを中心とする越境文化研究イニシアティヴのメンバーです。こういったことは，金時鐘の詩，そして在日文学一般の重要性を照らし出す新たな概念的枠組が生まれてきつつある動向を反映しているように思われます。

そのようなわけで，私は，在日文学を，英訳を用いながらグローバルなコンテクストのなかで教えられる日が来ることを心待ちにしています。そのときには，金時鐘の詩作品だけでなく，彼の政治的・社会的・文化的な諸活動，たとえば 1950 年代の『ヂンダレ』のことなども教えられればと思っています。私自身の研究の文脈とも関わって，金時鐘のテクストについて最も重要な点として最後に強調しておきたいのは，金時鐘のテクストは，依然として支配的な西洋流のアイデンティティや言語の観念を見直し組み替え新たな理論化に進もうとする際に，私たちを助けてくれる基礎的な在日テクストとしての重要性を持っている，という点です。

北米における在日研究についての私の考えをお話しできるこのような機会を与えてくださったことにあらためてお礼申し上げますとともに，90 歳を迎えられた金時鐘さんの偉大な詩業の旅路がこれからも末永く続くことを願いつつ，私の報告を終わらせていただきます。